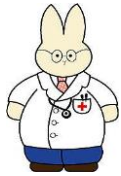


めぐみ在宅地域緩和ケア研究会



NEWS LETTER

2017. 6 NO. 119

めぐみ在宅クリニック（在宅療養支援診療所）

〒246-0037 神奈川県横浜市瀬谷区橋戸2-4-3

TEL:045-300-6630 FAX:045-300-6631

在宅看取りの問題が解決できない理由

超高齢少子化多死時代にむけて、地域包括ケアシステムが謳われて久しいです。「在宅医療・介護連携推進事業」が2015年度から始まり、2018年4月までには全国で医療-介護連携の体制ができあがるとされていましたが、在宅での看取りの問題は必ずしも解決していません。

なぜ受け皿が整備できないまま、今を迎えているのか？という議論があまりにも少ないことに危惧を覚えます。

厚労省は、この20年近く、2025年には、超高齢少子化多死時代が来ることを想定し、介護保険の導入、在宅療養支援診療所の導入など、積極的にこのテーマに予算をかけてきたと感じています。しかし、実際には昨年7月の報告にあるように、十分な受け皿が整備できていないと思います。今まで投資した予算や取り組みが、なぜ奏功しないのか、その議論がないまま、今を迎えているように思います。

これは、あくまで個人的な感想です。顔が見える関係は大切です。ITを使った情報の共有も大切です。もちろん、意思決定支援も大切です。しかし、これだけでは看取りの対応はできないと思います。人が死んでいくプロセスに関わることは、経済誘導や、従来の施策だけでは解決できないと思います。

なぜ、まもなくお迎えが来る人に、時間とエネルギーを注ぐのですか？と問われて答えることができる人はどのくらいいるのでしょうか。

この30年、日本で看取りに関わってきた医療は、ホスピス・緩和ケア病棟です。このホスピスマインドの教育・対人援助の大切さを含まない施策では看取り対応は困難であると感じています。

これからの時代、医療を専門としない介護職の皆さんも、看取りに関わらないといけない時代です。しかし、国の施策ではそこまで届いていません。

死を前にした人に、あなたは何かできますか？

この問いに、“私にできることがあります”と、関わる人が援助を言葉にできない限り、地域での看取り対応は整備できないと感じています。もちろん、これだけでは解決できない他の問題も多々あるでしょう。

2025年まであと375週程度です。あっという間

です。限られた時間で何ができるのか、いつも逆算しています。

道は厳しいかもしれませんが、だからこそ、夢をもって、仲間を集め、困難と向き合える人材を1人でも多く集めていきたいと思えます。今週は緩和医療学会が横浜で開催されます。全国の仲間と夢を語りたいたと思います。小澤竹俊

介護施設向けの学習会開催

「人生の最後まで安心して過ごせる介護施設を目指す会」という学習会を、めぐみ在宅クリニックと関連する介護施設で作りました。その学習会を横浜市泉区にあるグリーンヒル泉・横浜で開催します。今まで看取りに苦手意識を持っていた人が、関わる自信を得るために、特に援助的コミュニケーションを学ぶ機会を提供したいと考えています。苦しんでいる人は、自分の苦しみをわかってくれる人がいると嬉しいこと、その上で、誠実に関わる方策を紹介したいと思えます。

第22回日本緩和医療学会学術集会

2017年6月23日(金)～24日(土)に開催される日本緩和医療学会では、シンポジウム「2025年に備えて緩和ケアを考える」(23日)のパネリストとして、そして、認定看護師向けのフォローアップ企画でコメンテーターとして参加します。首都圏における2025年問題は、きわめて深刻です。先駆的に取り組んでいる医療機関のプレゼンの1つとして人材育成の話を用意します。また、24日(土)の朝には、認定看護師さん向けの交流フォーラム「がん治療中の患者・家族を支える医療者にできること」でスピリチュアルケアについて話をします。事例に挙げたケースをみたとした1対1のロールプレイも、即興で行う予定です。

診療実績

	2006- 2016年	2017年 1-2月	3月	4月	5月	2017年 計	総計
訪問回数	50,852	1,464	826	732	768	3,790	54,642
自宅永眠	1,769	11	17	22	22	72	1,841
施設永眠	218	9	2	6	6	23	241
在宅 (自宅+施設)	1,987	35	19	28	28	110	2,097
病院永眠	487	15	14	10	5	44	531